

令和 元年 5 月 31 日現在

機関番号：13901

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2018

課題番号：15KK0120

研究課題名（和文）文化的価値の伝達：個人の選好および文化化による影響（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）The transmission of cultural values: The influences of individuals' preferences and acculturation(Fostering Joint International Research)

研究代表者

石井 敬子 (Ishii, Keiko)

名古屋大学・情報学研究科・准教授

研究者番号：10344532

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,700,000円

渡航期間： 6ヶ月

研究成果の概要（和文）：連続再生法を用いた共同研究を日米で行い、参加者の再生のパターンにおける文化的な共通点と差異について分析を行った。特に、文化的な価値を反映したものの見方（分析的注意か包括的注意か）に対応し、アメリカでは中心的な事物に関連した事物（例えば家の前の道）の再生率が、日本では周辺の事物（例えば雲）における再生率がそれぞれ高くなった。また、子どもの文化的産物に対する親のフィードバックの仕方が文化的産物に対する親の好みを反映した文化的な価値観（例えば調和）に対応する可能性についても検討し、その可能性と一致した結果が特に高齢者において強く見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化と人の心の性質との相互構成過程を理解するにあたり、文化から人への影響は、その心の性質の文化依存性についての集約的な研究によってその理解が進みつつある。一方、なぜその文化差が生じるのか、特にグローバル化の昨今、情報のポータル化によってその文化的差異は減じても不思議ではないにもかかわらず、なぜその差は維持されてきているのかについて、文化の成員間でのコミュニケーションや相互作用の結果に着目することへの重要性や方法は論じられているものの、実証研究に乏しい。その意味で、他者に情報伝達する際、文化的価値に関連したものの見方に影響されたバイアスが生じることを実証的に示した本研究の意義は大きいだろう。

研究成果の概要（英文）：I conducted a study with a serial reproduction method in Japan and the US and analyzed cultural similarities and differences in how the participants would reproduce the picture of a landscape which had been shown shortly. Reflecting culturally dominant ways of attention (i.e., analytic vs. holistic attention), Americans were more likely than Japanese to reproduce an object related to central ones (e.g., a path in front of a house), whereas Japanese were more likely than Americans to reproduce objects in the background (e.g., clouds). I also examined a possibility that parents' preferences to cultural products produced in their own culture, which accompany a culturally dominant value (e.g., harmony), would be associated with how they give a feedback to cultural products produced by kids. Japanese adults' preferences to Japanese colorings were positively associated with the likelihood they gave feedback related to harmony, and the tendency was strongly found in older Japanese people.

研究分野：社会心理学

キーワード：文化 価値 認知

## 1. 研究開始当初の背景

文化心理学の研究は、さまざまな内省指標や行動指標、さらには神経基盤に関する指標を用い、人の心の性質がそれぞれの文化圏で歴史的に培われてきた意味体系や信念、価値、社会規範に応じて異なっていることを明らかにしてきた。しかし、文化を特徴づける意味体系や信念、価値、社会規範がどのように維持、継承されているのかについての理論的考察はさほど進んでいない。

申請者は近年その価値や意味体系の維持プロセスに関心をもち、研究を進めている。本国際共同研究の基課題となる基盤研究 (C) (文化的価値の伝達：個人の選好および文化化による影響) は、申請者の先行研究 (2011-2013 年度若手研究 (B)) が示した文化的価値の維持と個人の選好との関連、その社会化・文化化による影響、さらには優勢な価値を反映した親から子へのフィードバックに基づき、意味体系や文化的価値の維持・変容のプロセスに焦点をあて、さらに文化化による影響に関する知見のフォローアップを目指したものである。基課題は、主に、1) 人から人へ文化的産物が再生されていく過程において、当該の文化において優勢な価値が意識されることなく付与されていく結果、出発点が同じであっても、最終的な産物は当該の文化において優勢な価値を帯びた性質を伴い、文化間で大きく異なること、2) 文化化による影響は、文化的産物に対する好みのみならず、その産物そのものにも見られることを検討した。文化的産物に内包されている価値の維持・変容のプロセスに注目し、そこに文化化の影響を絡めた文化心理学の実験研究はこれまでほぼ皆無である。それ故、価値や意味体系の維持・変容のプロセスに着目した知見を蓄積させることは重要であり、本国際共同研究でも引き続きその点を検討していく。

## 2. 研究の目的

本研究が着目するのは、文化的産物に接することによる一方向からの文化的価値による影響に加え、文化を作り上げる個々人が文化的価値の運び手として積極的にその価値の伝達や維持に参加している点である。そして個々人が文化を再生産していく基盤となっているのは、自らの日常経験を他者に伝達したり、他者からの伝達内容からその行動の意図を推測したり、その意図の推測に基づいて自身のその場における行動を決めたり、さらにはその行動が翻って他者の行動に影響を与えたりする相互作用に他ならない。当該の文化における慣習の日常的な実践は、その状況を経験する人々の心の性質に影響を与えるが、ではそうした人々はその経験した状況をどのように伝え、今度はそれが新たな日常的な現実となって他者の心の性質に影響を与えるのだろうか。その経験の表象と解釈に、人々がもともと慣れ親しんでいる文化的な価値や認知スタイルは影響を与えるのか。さらには社会化の側面、具体的にはそのような文化的な価値による影響は発達の中のどの段階で見られるのか。本研究では、1) 連続再生法を用いた日米比較実験、2) 文化的価値に対する好みを反映した子どもの塗り絵へのフィードバックに着目した実験を行い、これらの点を探索的に検討した。

## 3. 研究の方法

### 研究 1: 連続再生法を用いた日米比較実験

参加者は 161 名のヴァージニア大学のアメリカ人学生と 155 名の神戸大学の日本人学生であった。参加者には、まずある風景画 (図 1) が 15 秒間示されるのでそれを見るように指示し、そして後ほど (3 分程度のフィラー課題後) 鉛筆を使ってその絵を再生してもらうこと、さらには伝言ゲームのように、参加者が再生した絵が別の参加者に示されてまた再生され、それがまた別の参加者に示され再生されていくことを伝えた。絵を媒体とした他者へのコミュニケーションという観点を参加者に伝えるためにこのような教示をしたが、実際には参加者の再生した絵は、他の参加者に見せられることはなかった。風景画は、中心的な事物 (例えば家) や背景的なもの (例えば雲) からなる絵で、15 の要素から構成されていた。

洋の東西で異なる自己観や価値を反映し、西洋においては独立性が、一方東洋においては協調性がそれぞれ優位であり、また認知様式に関しても西洋においては中心的な事物



図 1. 実験 1 で使用した風景画

に注意を払いやすい傾向に代表される分析的思考が、一方東洋においては中心的な事物のみならず背景を含めた全体に対して注意を払いやすい傾向に代表される包括的思考がそれぞれ優位である。実際、Masuda, Gonzalez, Kwan, & Nisbett (2008) は、参加者に風景画を描かせた場合、アメリカ人参加者と比較し、日本人参加者において地平線をより高い位置に描くといった文脈を重視した傾向が見られることを明らかにした。これらの知見を踏まえ、本研究では、アメリカ人と比較し、日本人では背景情報の再生率が高いこと、一方、中心的な事物に関しては日本人と比較してアメリカ人の再生率が高いことを予測した。

#### 研究2: 文化的価値に対する好みと子どもの塗り絵へのフィードバックに関する実験

参加者は子どもをもつ日本人成人 363 名(年齢が 20-30 代の参加者 186 名、60-70 代の参加者 177 名)だった。実験では、まず塗り絵に対する好み が測定された。具体的には、日米の塗り絵 60 組を参加者に呈示し、どちらが好きかを選んでもらった。その際、その塗り絵の文化についての情報は一切与えなかった。次に、先行研究において収集された子どもの塗り絵を呈示し、それに対するフィードバックの仕方を尋ねた。その際、こちらで事前に用意したフィードバックの候補を呈示し、どれが自身のフィードバックの仕方に合うかの順位づけをするよう依頼した。フィードバックは、独立性に関するもの(例えば、色を自由に塗りなさい)と協調性に関するもの(例えば、線からはみ出さないように塗りなさい)に大別された。Ishii, Miyamoto, Rule, & Toriyama (2014) は、異なる 2 つの実験を行い、日本人は調和のとれた日本人の塗り絵を好みやすいこと、そして日本人の親は子どもに対して協調性に関連したフィードバックを高く順位づけることを示したが、その 2 つの関連性、つまり日本人の塗り絵をより好む親ほど、子どもに対して調和性に関連したフィードバックを与える可能性については検討しなかった。そこで本研究ではその点を検討した。

#### 4. 研究成果

研究1では、先行研究を踏まえ、1) 絵における中心的な事物の 1 つである家の大きさ、2) 地平線の高さ、3) 各 15 要素の再生率に着目して分析した。図2に再生された絵の例を示す。1)

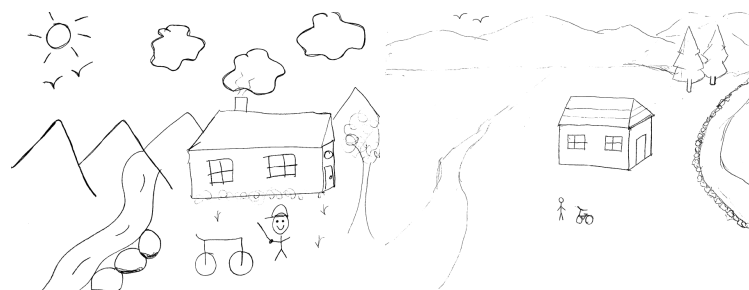


図2. 再生された絵の例(左:アメリカ人、右:日本人)

についてはアメリカ人が再生した家 ( $M =$

$60.17\text{cm}^2$ ) のほうが日本人のそれ ( $M = 56.96\text{cm}^2$ ) よりも大きい傾向が見られたが、統計的にはその差は有意ではなかった ( $p = .24$ )。2) についても文化差は見られなかった(アメリカ:  $10.63\text{cm}$ , 日本:  $10.60\text{cm}$ )。3) に関しては、文化にかかわらず、非常に再生されやすい要素(家:  $100\%$ 、人:  $89.8\%$ 、川:  $89.8\%$ 、太陽:  $85.5\%$ 、雲:  $85.5\%$ 、山:  $84.5\%$ 、自転車:  $84.2\%$ 、鳥:  $76.6\%$ )、中程度に再生されやすかった要素(大きい木:  $67.1\%$ 、石:  $66.8\%$ 、地平線:  $63.5\%$ )、再生率が低かった要素(花:  $46.4\%$ 、家の前の小道:  $43.8\%$ 、小さい木:  $24.7\%$ 、芝生:  $19.1\%$ )に分かれた。加えて、文化差も見られ、石(アメリカ:  $73.2\%$ 、日本:  $60.6\%$ ,  $p = .02$ )、家の前の小道(アメリカ:  $49.7\%$ 、日本:  $38.1\%$ ,  $p = .04$ )、山(アメリカ:  $88.6\%$ 、日本:  $80.6\%$ ,  $p = .06$ )といった比較的中心的な事物に近くまた前景にあるものは、日本人と比較し、アメリカ人において再生率が高くなっていた。一方、雲(アメリカ:  $75.8\%$ 、日本:  $94.8\%$ ,  $p < .001$ )といった背景情報、そして自転車(アメリカ:  $79.2\%$ 、日本:  $89.0\%$ ,  $p = .02$ )では、アメリカ人と比較し、日本人において再生率が高くなっていた。上記の結果は、一部の要素に限定されるものの、文化で優勢なものの見方を反映し、そうした優勢なものの見方に見合ったものが他者へと伝達されやすく、そうした伝達のバイアスがさらにその当該の文化において優勢なものの見方を強化していく可能性があることを示唆する。

研究2では、Ishii et al. (2014) の結果を追認し、日本人成人は日本産の塗り絵をより好み ( $M = 59.7\%$ ,  $SD = 13.3\%$ )、チャンスレベル ( $50\%$ ) と比較しても有意な差が見られた ( $t = 5.06$ ,  $p < .001$ )。またフィードバックに関しても、独立性に関するものより ( $M = 4.39$ ,  $SD = 0.63$ )、協調性に関するもののほうが高い順位であり ( $M = 3.44$ ,  $SD = 0.66$ )、この文化差も有意であった ( $t = 15.08$ ,  $p < .001$ )。そして日本産の塗り絵に対する好みと独立性・協調性に関するフィードバックへの順位づけの相関を調べたところ、独立性との相関は  $r = .15$  ( $p = .006$ )、協調性との相関

は  $r = -.20$  ( $p < .001$ ) であり、それぞれ統計的に有意であった。予測と一致し、日本産の塗り絵を好む人ほど協調性に関するフィードバックを与えやすく、一方で独立性に関するフィードバックは与えにくいことが示唆された。また 20-30 代と 60-70 代の年代ごとにこの相関パターンを調べると、20-30 代においては、独立性との相関は  $r = .07$  ( $p = .32$ )、協調性との相関は  $r = -.11$  ( $p = .15$ ) でありともに有意ではなかったが、60-70 代においては、独立性との相関は  $r = .21$  ( $p = .006$ )、協調性との相関は  $r = -.29$  ( $p < .001$ ) であり、いずれも有意だった。この結果は、自身の文化的価値に合った産物に対する好みは、その文化における子どもたちへの働きかけにも影響を与え、そしてその結果として子どもたちがその価値を好み、またその価値を反映したものを産出することで当該の文化において優勢な価値観は維持されていくことを示唆する一方、少なくとも今回の日本人の成人サンプルにおいてはその傾向が高齢者に限定されていることも示唆しており、今後さらなる検討が必要である。

## 5 . 主な発表論文等 (研究代表者は下線)

### [雑誌論文](計 11 件)

- (1) Mori, Y., & Ishii, K. (in press). The effect of auditory imagery for speech in reading in Japanese. *Current Psychology*. doi: 10.1007/s12144-018-9946-z (査読付き)
- (2) Eisen, C., & Ishii, K. (2019). Sociocultural variation in reactions to a group member's vicarious choice and the role of rejection avoidance. *Frontiers in Psychology, 10*, 1311. doi: 10.3389/fpsyg.2019.01311 (査読付き)
- (3) Ishii, K. (2019). Cultural influences in somatosensory amplification and their association with negative affectivity. *Asian Journal of Social Psychology, 22*, 106-112. doi: 10.1111/ajsp.12342 (査読付き)
- (4) Ishii, K., & Eisen, C. (2018). Cultural similarities and differences in social discounting: The mediating role of harmony-seeking. *Frontiers in Psychology, 9*, 1426. doi: 10.3389/fpsyg.2018.01426 (査読付き)
- (5) Li, L., Masuda, T., Hamamura, T., & Ishii, K. (2018). Culture and decision making: Resource allocation in a fort game between European Canadians and Hong Kong Chinese. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 49*, 1066-1080. doi: 10.1177/0022022118778337 (査読付き)
- (6) Bjornsdottir, R. T., Tskhay, K. O., Ishii, K., & Rule, N. O. (2017). Cultural differences in processing a person as a whole: Evidence from emotion recognition. *Culture and Brain, 5*, 105-124. doi: 10.1007/s40167-017-0053-z (査読付き)
- (7) Ishii, K., Eisen, C., & Hitokoto, H. (2017). The effects of social status and culture on delay discounting. *Japanese Psychological Research, 59*, 230-237. doi: 10.1111/jpr.12154 (査読付き)
- (8) Ishii, K., Mojaverian, T., Masuno, K., & Kim, H. S. (2017). Cultural differences in motivation for seeking social support and the emotional consequences of receiving support: The role of influence and adjustment Goals. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 48*, 1442-1456. doi: 10.1177/0022022117731091 (査読付き)
- (9) Ishii, K., Rule, N. O., & Toriyama, R. (2017). Context sensitivity in Canadian and Japanese children's judgments of emotion. *Current Psychology, 36*, 577-584. doi: 10.1007/s12144-016-9446-y (査読付き)
- (10) Masuda, T., Ishii, K., Miwa, K., Rashid, M., Lee, H., & Mahdi, R. (2017). One concept or two? Linguistic influences on the similarity judgment of objects between English and Japanese speakers. *Frontiers in Psychology, 8*, 1637. doi: 10.3389/fpsyg.2017.01637 (査読付き)
- (11) Oishi, S., Yagi, A., Komiya, A., Kohlbacher, F., Kusumi, T., & Ishii, K. (2017). Does a Major Earthquake Change Job Preferences and Human Values?. *European Journal of Personality, 31*, 258-265. doi: 10.1002/per.2102 (査読付き)

### [学会発表](計 4 件)

- (1) Ishii, K. (2019). Cultural influences in somatosensory amplification and their association with negative affectivity. Poster presented at the 20th Annual meeting of Society for Personality and Social Psychology, Portland.
- (2) Ishii, K. (2018). *Maintaining cultural values through physical media and the role of individuals as*

transmitters. Presentation at Social Lunch, University of Virginia.

- (3) Ishii, K., & Eisen, C. (2018). *Cultural similarities and differences in social discounting: The mediating role of harmony-seeking*. 日本グループダイナミクス学会第 65 回大会 (神戸大学).
- (4) 成田明日香・石井敬子 (2018). 客体的自覚はズル行動を抑制するか？鏡と声が日本人に与える効果の比較. 日本社会心理学会第 59 回大会 (追手門学院大学).

〔図書〕(計 4 件)

- (1) Hitokoto, H., & Ishii, K. (印刷中). Comparative and contrastive emotion studies (XIII. Research into multilingualism, intercultural communication, and translation). In G. L. Schiewer, J. Altarriba, B. C. Ng (Eds.), *Language and Emotion: An International Handbook*. Mouton De Gruyter.
- (2) 石井敬子 (2018). 文化と社会心理. 野島一彦・繁榎算男 (監修) 竹村和久 (編) *公認心理師の基礎と実践 第 11 巻 社会・集団・家族心理学* (Pp. 169-181). 遠見書房. (総ページ 200)
- (3) Eisen, C., Ishii, K., & Hitokoto, H. (2018). Socioeconomic status, reactions to choice deprivation in group contexts, and the role of perceived restrictions on personal freedom. In M. Karasawa, M. Yuki, K. Ishii, Y. Uchida, K. Sato, & W. Friedlmeier (Eds.), *Venture into Cross-Cultural Psychology: Proceedings from the 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology* ([https://scholarworks.gvsu.edu/iaccp\\_papers/153/](https://scholarworks.gvsu.edu/iaccp_papers/153/)). (総ページ 260)
- (4) Karasawa, M., Yuki, M., Ishii, K., Uchida, Y. Sato, K., & Friedlmeier, W. (Eds.) (2018). *Venture into Cross-Cultural Psychology: Proceedings from the 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology* ([https://scholarworks.gvsu.edu/iaccp\\_proceedings/2/](https://scholarworks.gvsu.edu/iaccp_proceedings/2/)). (総ページ 260)

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/view/ishiik/>

6 . 研究組織

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

研究協力者氏名：大石 繁宏

ローマ字氏名：Oishi Shigehiro

所属研究機関名：University of Virginia (～2018 年 8 月), Columbia University (2018 年 9 月～)

部局名：Department of Psychology

職名：Professor

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。